

ブレイクの『ミルトン』における「詩人の歌」

松島正一

(1)

ウィリアム・ブレイク（一七五七～一八二七）の後期予言書の一つ『ミルトン』は全二巻、四十三図から成る叙事詩である。最初はジョン・ミルトン（一六〇八～七四）『失樂園』に倣って全十二巻の予定であったようだが、結局二巻で終わっている。パトロンのヘイリのもとでのフェルバム時代（一八〇〇年から一八〇三年まで）に構想された作品であるので、当時のブレイクの精神的・物理的状況が作品にも反映されている。完成した（つまり最後の図版が彫版された）のは、一八一〇年と考えられている。

ブレイクの全作品のなかでも後期予言書と呼ばれる『四ゾア』『ミルトン』『ジェルサレム』はその難解さで知られている。『ミルトン』はタイトルから自明なように主人公はミルトンであるが、このミルトンが詩人ブレイクの内部に入り、ブレイクと一体化し、さらに神話的人物ロスとも合体したり、分離したりする。時間の

経過も過去と現在が混然とし、現在の出来事かと思うと過去(あるいは未来)のことであったり(逆も真なり)、とにかく難解である。さらに、天上と地上、永遠界と現実界も混じり合う。

まず最初の「詩人の歌」と呼ばれる部分(第二図～第十三図)がとりわけ難解で読者のテキストへの参加を妨げているように思う。いや、はつきり言ってブレイクの予言書に慣れていない読者には退屈であろう。だが、困ったことにこの「詩人の歌」を過ぎないと主人公ミルトンは登場せず『ミルトン』の世界は大きく動き出さないのである。「詩人の歌」の難解さの理由は、ここで詳しく述べる余裕はないが、テキストの問題にもある。『ミルトン』の現存するコピーは四つあるが、それらが異なっているのだ。例えば、我々が現在、標準的テキストとするケインズ編のオクスフォード版は図版が四十三だが、ロングマン版は三〇五、十八、三十二の図版を省略しているというような事態が生まれてくる。

さて、イギリス・ロマン派の詩人たちにとってジョン・ミルトンの存在は大きな意味をもっている。周知のように、クロムウェルの共和派によるピューリタン革命は王権に反逆し、チャールズ一世を処刑した。ミルトンも一時期、共和派の陣営に参加した。

ロマン派の詩人たちの生きた時代はフランス革命の時代であった。彼らにとって十七世紀のイギリスは自由の花咲いた時期と捉えられている。そして十七世紀の詩人に自分たちの詩的想像力の源泉を求めた。ワーズワスの「ミルトン、今こそ汝は生きていくべきである」(“Milton, thou should be living at this hour”)は彼のミルトンに対する思い入れを歌ったソネット(一八〇二年九月)として有名である。ブレイクはミルトンの詩に対して最初の適正な批評を、それも評論という形ではなく叙事詩という形式で行ったのである。それもミルトン

という登場人物を設定し、彼を作品のなかで動かすという方法をとったのは画期的なことであったといえよう。『ミルトン』のタイトル・ページには「神の配慮おぼいの正しきを人々に証明あかしする(平井正穂訳)」「(“To Justify the Ways of God to Men” Book I. 25)」という『失樂園』からとられた題辭が付されているが、ブレイクが「証明」しようとしているのは、ミルトンが『失樂園』や『復樂園』で描いた清教徒的な神ではない。ブレイクによれば、神は「永遠の偉大な神的な人」なのである。

『ミルトン』の主題を構成する三つの要素はゾアたちの墮落、ユリゼンとオークの闘争、人類の再生である。つまり、墮落フール↓革命↓贖罪のプロセスである。『ミルトン』でブレイクが試みたのは、ミルトンが陥ってしまった錯誤を彼自身に見させることによって、その誤まれるヴィジョンを修正し、さらに新たなヴィジョンを再創造させることにある。この作品以前にブレイクは「ミルトンがサタンおよび地獄を描くときのびのびしているのは、彼が真の詩人であり、それと知らずにサタンの仲間入りをしているからである」(『天国と地獄の結婚』)と述べている。ブレイクはミルトンが神とサタンの把握方に関して誤まりを犯してしまっていると考え、ミルトンを迷わせた錯誤を彼自身に見させるためには、自分の内部にミルトンを入れる必要があると感じる。ミルトンを自己の内部で一体化させることによって、ミルトンのヴィジョンの限界と、創造の目的に対してのミルトンの誤れる概念を暴露できると考えた。

『ミルトン』は詩人・予言者としてのブレイクの教育の過程を描く自伝的な詩であると言うことはできるが、ブレイクを主人公とするような伝統的な自伝とは異なっている。ブレイクは自己の先駆者としてミルトンを指名し、彼に精神の遍歴をさせる。ミルトンの存在と彼の作品はブレイクにアイデンティティを教え、詩と予言

の役割をブレイクに発見させるべく導く。そのためにはミルトンとブレイクは合体しなければならぬのだ。

『ミルトン』には長い「序」がついている。まず、前半部。

すべての人々が軽蔑すべきホメロス、オヴィディウス、プラトン、キケロなどの剽窃され、曲解された著作は聖書の崇高さに反対せんと策略を用いて仕組まれている。だが、新しい時代が余裕をもって宣言すれば、すべては正しく配置され、より古代の意識に公然と靈感を受けた人々のあの偉大な著作は、その正当な位置を占め、記憶の娘たちは靈感の娘たちとなるであろう。シェイクスピアとミルトンはともに愚かなギリシャ、ラテンの剣の奴隷たちからの一般的な疾病と感染によって轡鎖をつけられている。

ブレイクのここでの主張は、ギリシャ、ラテンの模倣による芸術よりも聖書の崇高さに与するということ、さらに記憶に対して靈感の優位ということである。ところで、ブレイクはホメロスに関して、「私は汝ら皆が知るホメロスの英雄ではない。私は敵に対して寛大であるとは公言しない。私の寛大は味方に対するもので、私は彼らの友情に埋め合わせができる。敵に対して寛大な者は敵の目的を助長し、味方の敵で裏切り者となる」(『ノートブック』)という戯文を書き残している。

さらにブレイクには『ホメロスの詩について』『ヴェルギリウスについて』(一八二〇年頃彫版)という二つの散文がある。ここでブレイクは古代ギリシャ人を「戦争の促進者」、かつ「学芸の曲解者」として批判し、これ

に対してゴシックを高く評価する。「ヨーロッパを戦争で荒涼とさせるのはゴード族でも修道士でもなく、ギリシャ、ラテンである」(『ホメロスの詩について』)。「ギリシヤ的は数学的形態、ゴシックは生ける形態。数学的形態は理性の記憶において永遠である。生ける形態は永遠の存在である」(『ヴェルギリウスについて』)。ブレイクはギリシヤ的思考は記憶を重視する行き方であり、これは靈感、つまり想像力とは対立するものと考える。「想像力は記憶と何ら関係がない」(『ワーズワズ詩集』への傍注)のである。

「序」の後半部分はブレイクの同時代に対する現状分析と、抑圧機構に対する戦いを訴えている。

目を覚ませ、おお、新しい時代の若者らよ！ 無知な傭兵たちに対して、きみらの額を突き合わせよ！
なぜなら我々は兵舎に、法廷に、また大学に傭兵たちをかかえているから。彼らは、できるものなら、永久に精神の戦いを抑圧し、肉体の戦いを長びかそうとする者である。画家たちよ、きみたちに訴えよう。彫刻家たちよ、建築家たちよ！ 軽蔑に値する作品に代価を払うふりをし、そのような作品を自分たちが作ると高価な宣伝をして自慢し、きみたちの力を抑圧する当世風の愚者たちに辛抱するな。破壊に全き喜びを感じる人間の階級がいるということ、キリストとその使徒を信ぜよ。我々が我々自身の想像力、我々が主イエスのなかに永久に生きるその永遠の世界に対して、正しくかつ誠実であれば、ギリシヤやローマの模型などは必要ではない。

そして、この後に四連からなる詩行が続く。最初の二連は四つの疑問文から成る。

これらの足は太古に

イングランドの緑の山々を歩いたか。

聖なる神の仔羊が

イングランドの楽しき牧場に見られたか。」

神の顔が

雲におおわれた丘の上で輝いたか。

ジェルサレムはここに

この暗い悪魔の工場（ファクトリー）のなかに建てられたか。

「これらの足」を持つ巨人アルビオンはかつてイングランドの山々や牧場を歩いていた。ブレイクにとって、神性なる人間アルビオンは普遍的人間の代表であるとともに、かつてはイエスと同一であったのだ。

第二連では理性の雲におおわれたイングランドの丘と、神の顔の輝やきが対照される。「暗い悪魔の工場」は産業革命のイメージなのだろうか。ハロルド・ブルームはこのイメージを『自然宗教は存在しない』（第二集、一七八八年）の「限定されるものはその所有者に嫌われる。同一の沈滞した道程は、たとえ全宇宙であろうとも、やがて錯綜せる車輪をとりつけた水車となるであろう」と結びつけている。

『ミルトン』ではサタンの水車（ウォーター・ミル）は創造を押しつぶし、生成の世界をアルロの抽象物に変化させる悪しきものと

してある。従って、先に引用した四つの疑問文は決して修辭疑問ではない。ブレイクはかつてイングランドにジェルサレムが建てられたと信じている。しかしサタンの水車ミルはジェルサレムが存在したはずがないと考え、その証拠を提供しようと躍起になっている。

サタンのこの挑戦に対して、ブレイクはこう述べる。

輝ける黄金の弓を持ってこい。

欲望の矢を持ってこい。

槍を持ってこい。おお、雲よ、開け。

炎の戦車を持ってこい。

私はこの精神の戦いを止めはしないぞ。

私は剣を手中に眠らせはしないぞ。

緑なす心楽しいイングランドの地に

ジェルサレムを建立するまでは。

「黄金の矢」は創造的なもので、ユリゼンのあの黒い矢(『アハニアの書』)とは対照的なものである。ブレイクは「欲望の矢」「槍」、ミルトンの「炎の戦車」などを自己の積極的な道具として、永遠の都市ジェルサレム

の建設のために戦うのである。彼の戦う相手は兵舎、法廷、大学などの諸制度のなかにいる。いや、彼にとっては制度そのものが敵なのである。制度は彼を抑圧し、困い込もうとするが、ブレイクはこのイングランドを「緑なす心楽しい」大地とし、永遠の都立シエルサレムを建立するまで戦い続けるのである。

詩人であり予言者であるというミルトンのな役割を果さんがために、ブレイクは「序」の最後に『民数記』(Numbers, xi. ch. 29 v.)から「主の民がみな預言者となることは願わしいことだ」(“Would to God that all the Lord's people were Prophets.”)を引用する。この言葉はヨシユアに対するモーセの叫びであるが、『ミルトン』ではモーセはブレイクの分身パラマブロンとして贖われることになる。

(2)

『ミルトン』での物語を大きく分けると、四つの部分から成る。(一)詩人の歌。(二)ミルトンの自己更新の旅。(三)オロロン(≡ミルトンの流出)のミルトンを捜す旅。(四)ロスの仕事の描写。

「詩人の歌」は連続した出来事を述べるというよりも、サタンの墮落の物語をブレイクは自己のヘイリとの経験に引きつけて語る。サタンはユリゼンであるが、このサタンはブレイクのフェルバム時代のパトロロンであったヘイリと二重写しになっている。ブレイクとヘイリの関係は「サタン≡パラマブロン神話」といわれるものとなり、サタンとパラマブロンとの口論の話が語られる。パラマブロンはブレイクその人であり、ブレイクとヘイリの関係は、芸術家と彼と抑圧する者との関係である。ヘイリはブレイクにとって「物質的な友人は精神の敵である」(四・二六)、また「パラマブロンはサタンの敵であった」(七・三八〜九)。

『ミルトン』は叙事詩の伝統に従って、ビューラの娘たち、詩神への祈願インボクエイツロンで幕を開く。

ビューラの娘たちよ！ 詩人の歌に息を吹き込むミュージタたちよ、

様々な美の柔らかい性的妄想をもって、恐怖と穏やかな月の光の輝く

汝らの国々を往く不滅のミルトンの旅を記録せよ、

放浪者を榮ませ、その燃える渴きと氷る餓えを

鎮めるために！ 我が手の中に来れ、

汝らの穏やかな力によってわが頭脳の門から出てわが右腕の神経を降って。

その門の所で汝らの奉仕によって

永遠の偉大な神性な人がその庭を拓き、

そのなかで死者の幻霊をして彼自身の姿に似せた美しい形をとらせた。

汝の影の土地の下で生成した虚偽の舌について

その犠牲と捧げ物についても語れ。

目に見えぬ神の姿であるイエスが、

アルピヨンの諸天において、彼の流出ジェルサレムの門前で

ビューラの下の諸天において、永遠の死のための

餌食となり、呪咀となり、捧げ物となり、償いとなったときまで。

語り手である詩人は現在が錯誤のなかにあると認識している。ここに出てくるビュースラとはアルロと呼ばれる物質の世界(つまり現実界)と永遠界の中間にある。また、ブレイクの体系では、ビュースラは意識の四態のなかで第三態である。ここビュースラは錯誤の影のなかにあるが、永遠界の薄明が及んでいる所でもある。『ミルトン』第二巻の冒頭でビュースラは次のように描写されている。

対立が等しく正しい場所がある。

この場所はビュースラと呼ばれる。それは心地よく美しい影で

そこでは口論は生じない、眠れる人々のゆえに。

(三〇・一―三)

ミルトンは柔らかな性的妄想に打ち勝ち、ビュースラを通じて生成界を通り抜ける。ブレイクはミューズに彼自身の頭脳の門から、創造的な右腕の神経を降って、手の中に来るようにと祈願する。ブレイクの象徴体系では、右が霊方、左が凶方であることは記憶しておかなければならない。頭脳の門のところに、詩人の「庭」が拓かれたが、ビュースラの娘たちはその建設を助けてくれた。「虚偽の舌」の出典は「主よ、偽りのくちびるから、欺きの舌から、わたしを助け出してください。欺きの舌よ、おまえに何が与えられ、何が加えられるであろうか。ますらおの鋭い矢と、えにしだの熱い炭とである」(『詩篇』第一二〇篇二―四)であるが、「虚偽の舌」とは真理の現世的誤解を示す。ブルームは墮落したサーマスを指すと述べている。

ブレイクは続けて詩神たちに次のように言う。

第一に言え！ 何がミルトンを動かしたのか。

摂理の入り組んだ迷路を思案しながら、永遠界を百年間歩いた彼を。

天界にいるが不幸わせて——彼は服従し、つぶやかず、

苦悩しながら深淵に撤き散らされた彼の六重の流出を見ながら

黙っていた——彼女を救い、自らは滅びるために深淵の中に入っていく。

(二・一六〇)

ジョン・ミルトンが死んだのは一六七四年であるが、ブレイクはその百年後、ミルトンの伝統のなかで詩を書き始めたことになる。ミルトンは『失楽園』で永遠界を視覚化して描いているが、ブレイクからみるとミルトンは不平はこぼさないが、天界で不幸わせにみえる。彼を見る「六重の流出」とはミルトンの三人の妻と三人の娘であり、彼は彼女らを置き去りにしてきたのだ。

どんな大義がついにミルトンをこの前例のない行為

詩人の預言の歌へと動かしたのか。永遠の食卓にむかって

アルビヨンの息子たちの間で恐れつつ、敵かで高らかな合唱で叫び出した。

すべての者は坐ってこの畏ろしき人を謹聴した。

(二・二二〇二四)

『ミルトン』で試みられているのは破棄された『四ゾア』の再考と考えれば、『四ゾア』を読了した読者には、

「詩人の歌」も難解にはみえないかもしれない。だが、やはり「詩人の歌」は難解である。その理由は明らかにブレイクが「詩人の歌」をどういう順序にすべきかを決定できなかったことにある。

ブレイクの本来の意向は叙事詩の伝統のなかで『ミルトン』を発展させることであつた。「わが言葉をよく聞け！ それらは汝の永遠の救いについての言葉ゆえに」という何度も繰り返される宣言は叙事詩のスタイルにのっとっている。そして、「詩人の歌」の長い叙述の結びは次のようになっていゝ。

……われは靈感を負うている！ われはそれの真なるを知る！

われは全てを護る永遠の神性なる人

詩靈の靈感に従つて歌うゆえに。

彼に対して永久に栄光と力と支配を。アーメン。

(一三・五一―一四・三)

詩人とは靈感を負つた存在である。ブレイクによれば、「詩靈は真の人である」(註)すべての宗教は一つである。詩靈とは全存在の根本原理、すなわち神であり、「予言の靈」なのである。

「詩人の歌」ではすでに前期予言書の一つ『ユリゼンの書』や、『四ゾア』で語られた墮落の物語、ユリゼンの苦惱、ロスの労働、ゴルゴヌーザの建設、サタンの誕生などが要約されて語られる。ロスは一族を増殖させていき、リントラ、バラマブロン、セオトモン、プロミオンの子どもたちが登場する。これら一族は三つの階級に大別される。これら三つの階級はロスのハンマーで創造され、エニサーモンの織機で肉体の形に織られる。

三つの階級とは「世界の建設以前からの選民」(The Elect)、「贖われた者」(The Redeemed)、「罪人、母の子宮から破壊へと形成された者」(The Reprobate)に分かれる(七・二～四)。サタンの階級は「選民」、リントラの人々は「罪人」、パラマブロンは「贖われた者」と呼ばれる(一・一・二一～二二)。ブレイクは「贖われた者」と「罪人」を二つの対照物 (contraries) と呼んでいるが、これは『天国と地獄の結婚』における「多産的」(the devourer) と「消費的」(the devourer) との分類に似ている。

ブレイクは旧来の分類を逆転させている。つまり、ミルトン『失楽園』において、イエスとサムソンは「選民」、アダムとイブは「贖われた者」、サタンとダリラは「罪人」の代表であったが、『天国と地獄の結婚』において「悪魔」と「天使」を逆転させたように「罪人」を真の天才、つまり詩人・予言者として捉えるのである。

巻頭から第十三図までの「詩人の歌」で六千年にわたる人間の歴史が詩霊の霊感 (The Poetic Genius) によって語られ、この歌が終わるとミルトンが登場し、『ミルトン』の本筋が展開されていくことになる。

(英米文学科 教授)